

へびの魔法  
改訂版  
(前編)

とくなのぞみ

この本は縦書きでレイアウトされています。

ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあることをご了承ください。  
本電子書籍は購入者の閲覧目的のためだけにファイルの閲覧が承諾されています。  
目的を超えた転載、配信、送信などの行為は著作権法上、禁じられています。

はじめに——マニフェスト・デステニー（明白な宿命）——

はじめに、ヨーロッパ史について、私が知っていることを少しお話しましょう。

フランス人に、自国の歴史のどこが一番好きかと尋ねると、一位はやはりフランス革命の時代（十八世紀後半）、二位はブルゴーニュ戦争の時代（十五世紀後半）なのだそうです。これを日本の歴史でイメージすれば、一位は幕末・明治維新の時代（十九世紀半ば）、二位は戦国時代（十六世紀後半から十七世紀前半）といったところでしょうか。

それでは「ブルゴーニュ戦争」とはいったい何でしょうか。

一言でざっくりと説明すれば、ヨーロッパ中世末期に、日の出の勢いで領土を拡大していった半独立国「ブルゴーニュ公国」（フランス王国の東隣、古代には「中フランク王国」または「ロタリングア」ロタールの王国）と呼ばれた地域）の、栄枯盛衰と滅亡の物語、ということになります。

ただ、なぜこの国が「ロタリングア」（ドイツ語読みで「ロートリングン」）ではなく、「ブルゴーニュ」（中世フランス語では「ブルグン」と発音したようですが、そういう細かい話はここでは止よしにしましょう）と呼ばれたのかについては、若干の説明が必要になります。

すでに『ニーベルンゲンの歌』でも解説したように（拙著『賽の河原』参照）、ゲルマン民族の一

派、ブルグント族が最初に建国したのは、現ドイツ、プファルツ地方の古都ヴォルムスでした。ところがこの王国は紀元四三七年、フン族の王アッティラに攻められ滅亡。生き残ったわずかなブルグントの人々は、ローマの將軍アエティウスの命により、南方の荒地（ジュネーヴ湖畔）へ移住させられたのでした。

拙著『賽の河原』でさんざん引用させていただいたW・ハンゼン氏によれば、この「新しいブルグント」は、わずかの歳月で息を吹き返したというのですが、なぜローマ帝国がそれを許したのか、あるいは先住の諸民族との関係はどうだったのか、など、私にはわからないことだらけです。

とりあえず、フアンタステイックな想像を展開させていただきますと、この「新しいブルグント」はおそらく、ローヌ川を伝ってジュネーヴから西方のリヨン、およびヴィエンヌに、さらにソーヌ川をさかのぼって北西のオートタンに、勢力を拡大させていったのだろうと考えられます。

この「ブルグント王国」は、四四三年から五三四年の間、独立国でした。その後、法律的にはフランク王国の属領になりますが、当時のフランク王国（メロヴィング朝）はいわゆる領邦国家であり、ブルグントの君主は慣例的に「王」を名乗りました。

九世紀、あのカール大帝の孫の代に、帝国（フランク王国＝ゲルマン人の治めるローマ帝国）は三つ

の王国に分裂しました（ヴェルダン条約。八四三年）。「ブルグント王国」は「中フランク王国」の一部ではありましたが、この「中フランク王国」は、たび重なる兄弟相続と三国の力関係により、次々と分割されていきました。北方のフリースラントと呼ばれる地域（※1）は、有名なメルセン条約（八七〇年）により、東西フランク王国に分割、吸収され、南のブルグントも、大ざっぱに見れば、同じ運命をたどりました。

【引用・その①】

むこうみず（シャルル突進公のこと。詳細は後述。引用者注）は「ローマ人の王」になりたかった。ブルグント王やフリースラント王（※1）ではいやだった。

（堀越孝一『ブルゴニーユ家——中世の秋の歴史』二五七頁）

※1 上記本文中の「フリースラント」および引用文中の「フリースラント王」は、いわゆる「アルザス・ローヌ」と同義です。参考文献の記述から、私がそう理解したのですが、歴史的に正確かどうか自信がありません。現在の「フリースラント」はオランダ、およびドイツの北海沿岸地方を指す地名だからです。「アルザス・ローヌ」は無難に言えば「ロタリンギア」でしょうが、素朴な疑問として、王子ロタール

が生まれる以前には、この土地は何と呼ばれていたのでしょうか？ 専門家による解説をお願いしたいです。

なお、「ロタリンギア」には「上<sup>かみ</sup>」と「下<sup>しも</sup>」があり、「上ロタリンギア」が「アルザス・ロレーヌ」に相当し、「下ロタリンギア」が「オランダ」に相当するようです。また、「フリースラント」の字義は「フリース人の土地」であり、「フリース語」は「ドイツ語よりも英語に近い言語」だそうです。

何が言いたいのかと言いますと、たとえば「アイヌ」は、江戸時代には「北海道」にしかいなかったとしても、古代には「東北地方」にも住んでいたのではないか、みたいなことです。つまり九世紀当時、「フリース人」が「アルザス・ロレーヌ」の山岳地帯にも住んでいたかもしれない、という「ファンタジー」です。(二〇二四年九月加筆)

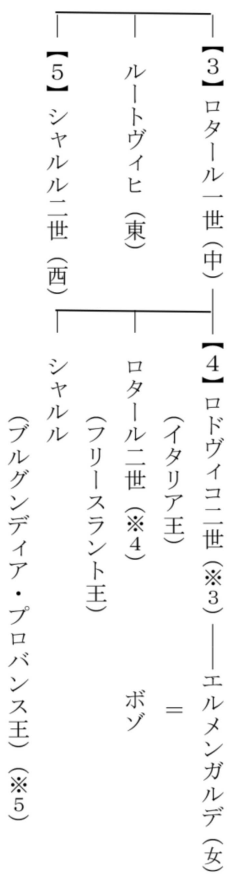
少し細かく書きますと、八七九年、ブルグント王国は(ローマ) 皇帝ロドヴィコ(または、ルートヴィヒ)二世の娘婿ボゾによって、言わば女系相続されました。この「ボゾの王国」がその後、三つに分割されていきます。

〔系図・その①〕



※2【1】【2】【3】は、ローマ帝国の皇帝位。

〔系図・その②〕



(ブルグンディア・プロバンス王) (※5)

※3 ロドヴィコ（イタリア語）、ルイ（フランス語）、ルートヴィヒ（ドイツ語）は、名前としては同じものです。【2】ルートヴィヒ一世敬虔王、に対して、【4】ロドヴィコ二世Ⅱルートヴィヒ二世、ということですが、同様に、カール（ドイツ語）とシャルル（フランス語）も同名です。つまり【1】カール一世大帝、に対して、【5】シャルル二世Ⅱカール二世、です。

たとえば「フランス王家」について語る場合、ルイ十八世に連なる「ルイ」という名の最初の王は「ルイ一世敬虔王」（上記の表では【2】ルートヴィヒ一世）になります。ですが、フランク族はゲルマン民族だったわけですから、ここでは「ドイツ人らしく」「ルートヴィヒ」と記述しました。「フランス人の王」が登場するのは、九八七年の「ユーク・カペー」（カペー朝）以降だと思えます。

※4 筆者は「ロタリンギア」を、「ロタール一世の国」と理解しておりますが、一般的には「ロタール二世の国」、つまり現在の「アルザス・ロレーヌ地方」（ドイツ語読み「エルザス・ロートリンゲン」）を指しているのかもしれません。この地域は長らく、独仏二国間の係争地域となっていました。現在はフランス領です。

※5 「ブルグント王」と「ブルグンディア・プロバンス王」の領地は同じです。資料による表現の違いです。シャルル（ブルグンディア・プロヴァンス王）に男子継承者がいなかったために、シャルルの領土をボゾが



継承した、という形です。

「三つのブルグンデイア」 「ボゾの王国」がさらに分裂

①ソーヌ川西岸⇨フランス領ブルゴーニュ侯領（オートタン、ディジョンなど）

支配者の推移⇨リシャール（ボゾの弟）家⇨カペー家系ブルゴーニュ侯家

⇨ヴァロワ家系ブルゴーニュ侯家

②北ブルグンデイア（ユラ⇨ドイツ語/ジュラ⇨フランス語。ジュラ高地）

(i) トランスユラ・ブルグント王国⇨ジュネーヴ湖（レマン湖）周辺（八八八年〜）

(ii) ソーヌ川東岸⇨ドイツ領ブルグント伯領（ブザンソン、ヌーシャテルなど）（※6）

※6 通称「フランシユ・コンテ」。ドイツ語の「フライ・グラーフシャフト⇨自由伯爵」の直訳。「自由伯爵領」の意。現在はフランス領。

支配者の推移⇨ウエルフ家⇨フランドル伯家⇨ヴァロワ家系ブルゴーニュ侯家

（一三六九年）

③南ブルグンデイア

(i) ドーファイネ (ヴェイエンヌ、ヌーシャテルなど)

支配者の推移⇨ボゾ家⇨ドーフィン家 (「イルカ」の意。※7) ⇨フランス王国

※7 フランス王太子のことを「ドーファン」と呼ぶのは、この「ドーファイネ」から来ています。王太子直轄領です。

(ii) プロバンス (アルル、アヴィニオンなど)

支配者の推移⇨ボゾ家⇨ローマ法王領、小さな地元伯領⇨トゥールーズ家、アンジュー家など

※8 ②が③を併合し、「アルル王国」だった時代もあります (九三三年〜)。

フランス中世史に華々しく登場する「ブルゴーニュ公国」とは、十四世紀半ばに男子継承者を欠いたカペー家系ブルゴーニュ侯家に代わり、ソーヌ川西岸 (前ページの表の①) を受封した、ヴァロワ家系ブルゴーニュ侯家の治めた公国です。この侯家は四代、百十余年の歴史でした。再び表で示します。

【1】フィリップ・ル・アルデイ (フィリップ豪胆公) 一三四二〜一四〇四 (在位一三六三〜一四〇四)